田村円澄著
法然上人伝の研究

法然は、いまさらいうまでもなく、わが鎌倉仏教史の劈頭をかざる人物である。ところが、あまりよく知られているためにかえつて、『法然上人伝の研究』といえば、もう中味がほぼ見当つく、といつた錯覚に陥りがちである。そして、そういうばあいには、たいていは、難解な仏教用語や典籍とか、または宗門の伝統的な論題や荘厳・讃歎のかずかず――つまりわるくいえば、カビのはえたようなせんさくが予測されがちである。

たしかにかつては、仏教史の研究が、そのように受取られても仕方のない時代があつたと思う。しかし近年では、そういう状態から脱却すべきだという考えや、新しい生きた歴史としてとらえようとする努力、が、次第につみ重ねられてきている。ここに紹介する田村円澄氏の新著、『法然上人伝の研究』も、そのような輝かしい努力の一つの結晶である。

とかく歴史家は、いわゆる高僧の伝記に語られる逸話の非現実性には鈍感になりがちであるけれども、つきつめてみれば、伝記の内容全体に信をおき難いという感じは多くのひとが一再ならず経験することである。実際、おおよそ高僧の伝記といわれるものほど、粉飾と創作にみちたものはないのである。最澄・空海・親鸞・日蓮いずれもしかりであるが、法然のばあいもまた同じことであつて、室町時代以前に成立した法然伝は十五種にものぼるが、そのまま史実として承認できるものはただの一篇もない。それが、中世的神秘主義による粉飾であろうと、露骨な宗派主義の創作であろうと、客観的な史実の解明のためにきわめて困難な障碍であることにはかわりない。しかし歴史家にとつて最大の困難は、それらの創作と粉飾の資料を通じて客観的な事実を再構成することであり、またそれが最重要の不可避的な途であること、であろう。

「日本仏教各宗祖の伝記は、ほとんどすべてが、神話化されている。神話と客観的史実に還元する作業が、日本仏教史を構成するための基礎作業であつた。」「法然伝記の神話化は最もはなはだしい一例であつて、そのために浄土宗の起源、ひいては鎌倉新仏教の成立に関する客観的史実の究明に大きな困難が感ぜられたのである。」――本書に序文を寄せられた家永三郎博士はこのようにのべ、つづけて、「友人田村円澄君は、はじめて法然伝の批判的研究という未墾の分野を開拓せられ、その成果が今この一巻の書となつて結実した。あたかも中沢（見明）氏が親鸞伝についてなされたと同じような作業を、君は法然伝について完遂されたのである。」と記されている。

著者田村円澄氏が、近年、日本仏教史の研究において、どのように活躍されているかは、あらためてのべるまでもない。本書の上梓の予告を知り、上述の事情を考えるにつけても、その一日も早からんことを願つたのは、筆者一人ではなかつたとおもう。

本書は全編を、三部に分つ。第一部三章は、「法然研究の展望」であり、諸々の法然伝の文献批判を中心とする、全編における準備的部分である。第二部二三章は「法然とその教団」と題し、誕生から滅後における鎮西教団確立までの史実の検討であり、いわば本論をなす。そして第三部「法然伝の諸問題」

（九章）は、以上の論究のあとになおのこされた若干の問題をあつかつている。

第一部において著者の主要な観点となつているのは、あまたの法然伝の作者にとつては法然が「求道者であるよりはむしろ救済者」であること、また諸伝記が多かれ少なかれ、法然歿後の各流派の法嗣者としての正統性の主張を盛りこんでいるという点である。著者は、史料としての諸法然伝の批判的研究にさいしてこのことに注意し具体的に虚構や作為を指摘するとともに、逆にそのことに反映されている客観的な事実を追究してやまない。そして、かかる方法により、著者は、現存十五種にものぼる室町以前成立の法然伝が、『源空私日記』ただ一つを原形に成立してくる過程を逐一考証しつつ、「現存する法然伝によつて、歴史的な法然像を追求することは不可能に近い」として従来のように『四十八巻伝』に依存する誤りを指摘し、むしろ法然研究にとつて根源的に重要である『西方指南抄』の研究の必要性を注意されるのである。

氏の業績について特筆すべきは、諸伝の否定的側面の指摘よりは、それらが成立した積極的根拠を明らかにされたことであろう。すでに周知のように、中沢見明氏は大正十二年、『源空私日記』が法然諸伝記の原形であることを証明された（「法然諸伝成立考」、『真宗源流史論』所収）のであるが、田村氏はこのすぐれた礎石に全体として依拠しながらも、その後の諸研究成果をとり入れつつ、考えられる限りにまで、諸伝の成立と系譜の大糸を確立されたのであつた。たとえば『四十八巻伝』が一方に「源空私日記—伝法絵」の系譜——これは法然を荘厳化するとともに宗内での自派の正統性を主張する——をうけるとともに、他方に「源空私日記—一期物語」の系譜——これは『選択集』の聖道門批判の精神をうけ浄土宗独立の立場である——に通ずることを指摘されるのであるが、それが「京都になかつた鎮西派の勢力が知恩院として結集した歴史的推移」の考慮とともになされているのをみるとき、われわれは、たんなる文献批判以上の成果を教えられるのである。

第二部、法然とその教団は、諸々の宗内伝記資料および玉葉・三長記などの宗外資料を批判的に駆使し、検討することによつて、構成されている。二十三章にわけて取り上げられたテーマは、多くがいままでの法然伝において一つの段落をなした著名な説話であるが、しかし、救済者としてではなく求道者としての、人間としての法然を探究される著者には、もとよりすべてが肯定の範囲であつかわるべきものではなかつた。たとえば誕生にまつわるほとんどの所伝は宗祖を神秘化する粉飾として否定されねばならず、また、同様な意味をもつ皇室との諸関係も宗門外史料によつて否認された。けれども、とりわけ注意されるのは、法然の南都遊学、大原談義、九条兼実との関係、元久や嘉禄の法難その他の取扱いにみられるように、往昔の伝記作者が意図したこととは別の歴史的意義が著者によつて汲み出されていることである。著者にとつては、古伝の正否の判定だけが問題なのではなく、その検討を通じて真実の法然の姿の再生こそが達成さるべきものであつたからである。だからまた著者には、法然伝とはいいながらも、法然はその教団と無関係に論ずることのできないものであつたし、資料の性格も一そうそれを不可避的にしたのであつた。

法然についてなんらの造詣もない筆者には、この第二部においてのべられた諸々の探

究の、細部にわたつて問題を指摘する資格はない。だが、筆者のみならず斯学にかかわるものにとつて、諸々の法然伝を読むときの、かの不安定な気分がここに一応地につけられ、考察の基地を与えられたということはいえるとおもうのである。法然の父は、師は、また痛ましい配流の真実は、いかにあつたか等については、読書の一読を切望するほかはない。

さきにのべたように、第三部、法然伝の諸問題は、第二部にのべられたことについての、若干の補足的な問題が扱われている。しかしそれらは、ただ派生的で第二次的なことの追加ではなく、たとえば、「遺誡文と起請文」「『選択集』撰述とその付属」などの章が含まれていることからわかるように、むしろ第二部に当然組み込まるべきかとみえるものもあるのである。というのは、この第三部が、著者の慎重な配慮から、なお、「法然とその教団」の史実として軽々には配列しかねる問題点や、重要であるからこそ別に詳論すべき事項の究明にあてられているためにほかならぬ。

なお本書は、巻末に約二十頁の「法然上人年譜」と、法然伝記名、書物、経論名、僧尼名、人名、寺院名、国名、地名、事項名に分類された二十六頁にわたる詳細な索引を附している。

さて、不充分ながら以上で一通りの内容紹介をおえたのであるが、なおつぎに門外者ながら幼稚な感想と疑問を、紙数のゆるされるかぎりで記しておくことも、また紹介の一助となるかとおもわれる。

まずはじめに、さきにのべたように法然伝の研究は中沢見明氏の業績をのぞけばほとんど未開拓の分野であつたことが、本書に一つの性格を与えているようにおもわれる。中沢氏によつてなされたのは、法然諸伝の成立そのものの究明であり、いまだ法然の全生涯の事件をいろいろ検討する仕事はなされていなかつた。したがつて田村氏には、法然の客観的な伝記を新しくつくることが課題となつたのは当然であつたが、しかもそのさい、古来の諸伝記の内容の整理そのものが仕事でもあるという現研究段階に制約されて、ともすれば諸伝記そのものの研究と交錯し、いささか混然たる体裁をもつにいたつたのである。だがそれはそれとしても、二三の、論理の飛躍というか説得力不充分というか、そんな箇所が気になるのである。著者は『源空私日記』が嘉禄の法難を記していないことからその成立年代についての中沢説を否定して、法然滅後四年まで遡及しうるとされるが、筆者にはいま一つ積極的根拠を欠くようにおもわれる。また、父時国と稲岡荘預所の定明との衝突を「律令国家の解体期における古代勢力と在地名主武士勢力との闘争史の一こま」とされるのも、法然の歴史的位置づけの基本線に関係するだけに、注意すべき立言ではある。けれどもそこには、一般的な類型が不確実な史料をもとに、やや性急に想定される傾きがないでもないとおもう。父の死を法然登山の後とする醍醐本の記事を支持されるのも、実際は著者が「遁世」を法然の宗教の重要なものとみなされていることにもとずくいささか主観的推測ではないかとあやぶまれる。このような点では、諸伝の批判的整理と、著者の推定とは、もつと峻別さるべきでなかつたろうか。

また、法然の言行についての著者の説明に対する、筆者の疑問の一つは、つぎのことで

ある。著者は法然が、専修とのべながらも余行をすてなかつたことを、いわばいたし方のないものとして「終生、自己をあらわに表現しなかつた」のだと、されるが、他方、住蓮・安楽や証空・隆寛らの門弟や、兼実や宮廷の女性ら、また庶民も、つねに法然の真意に無理解であつたとされる。すくなくとも本書のかぎりでは、法然の専修念仏がその要求にこたえた人々については具体的には示されていないのである。しかし、それならば法然の「専修念仏」は、歴史的に孤立していたということなのだろうか。あるいは、だれも真に理解しないのに「一向専修」が興隆したとは、どういうことなのであろうか。一例についていえば、筆者には、「堕落のゆえに」元久の弾圧がおこつたとされるのを読むと、著者が貴族の論理のからくりにひきこまれているようにみえる。「不徹底」や「堕落」は専修念仏と別のものではないとおもわれるからである。

さらに一つの問題は、諸伝における法然の粉飾、還相者としての神秘化の仕方についてである。著者は、伝記作者が天台や王法仏法相即を並べたてることを、法然の荘厳化、または浄土教団の独立如何という観点からだけ取扱われるであろうが、その荘厳化の内容によつては、教団分派や受容層や法難などの歴史的性格と直接に関連するのであるから、その視角からの説明がすこしあつてよかつたとおもう。真宗史における善鸞の異安心問題などの思想上の偏向問題の取扱いのきびしさをおもうにつけ、その感はさけられない。

さて、以上の若干の感想点も、くりかえしいうならば、やはり当面の研究課題が諸伝記の内容の整理からはなれえない段階であるという事情によるものとおもわれる。筆者は、右の二三の問題について著者の意見がないとは、ゆめにもおもつていない。というより、そのような問題への努力は、すでに著者の別の論攷に、これまた、学界の注視をうけつつ部分的に達成されているのである。筆者としては、著者が、すでにみずから基礎をつくられた、歴史と時代を背景にする浄土教史を、諸法然伝記の整理の仕事からはなれて、雄大な構想のもとに完成されるのをひたすら待望している次第である。

最後に、蛇足ながら、本書が今後の法然伝研究者にとつて共通の貴重な財産であり、一度は通過せねばならぬ基礎作業であることを強調して、つたない紹介をおえたい。誤解や妄断も多いかとおもうが、著者ならびに読者諸賢のお許しを乞いたい。

（A5版　本文・年譜二九五頁、索引二六頁　定価七〇〇円法蔵館）――黒田俊雄――

執筆者紹介

室賀信夫　前京都大学助教授
川口博　京都大学大学院学生
佐伯富　京都大学助教授
鶴岡静夫　東京文理科大学研究科学生
伊藤道治　京都大学人文科学研究所助手
田中彰　東京教育大学大学院学生
黒田俊雄　神戸大学講師